



題字 萩原田 親

No. 994

2023/4/1

日中友好新聞

発行所
日本中国友好協会
〒111-0053
東京都台東区浅草橋5-2-3
5階5F5号
電話 03(5839)3140(TEL)
FAX 03(5839)2141
http://www.jcfa-net.jp
E-mail: nikkishin@jcfa-net.jp
社務 03(5839)2141

日中友好協会
岡山支部
〒730-0034
岡山県北区下伊福
西町1-53 民主会館1F
TEL/FAX 0861 254-1006

日中友好協会
倉敷支部
〒712-4031
倉敷市福河町東3461-45
TEL/FAX 0861 433-7800

日中友好協会岡山支部ホームページ
<http://rizhongyouhao.jinaa.net/>
メールアドレス
nicchuokayama@yahoo.co.jp



中国人留学生との交流会」

真田紀子

2023年3月19日曜日に、京山公民館で標記の会を開催しました。

当日、我々、私、小川さん、田中さんの3人が京山公民館に到着して、美術工芸室のカギを開けた時には、もう楊さんは来られていて、待つていただいていたようです。

すぐに中でご挨拶をしました。名刺を出して、入会申込書をお渡しして、時間までしばらく待つていただきました。初対面です。

時間が来ても他に誰も参加がないので、4人での和やかな会が始まりました。

まず、全員の自己紹介をして、楊さんのお話です。フルネームは楊文華さんです。出身は内モンゴルです。

現在は岡山大学で、日本語の變化とその歴史を研究しておられるそうです。

どうして日本語を学ぶ事になったのかのお話が面白くて、笑っていました。中国の大学に進学して、本当はロシア語を学びたかったのにロシア語科がなくて、日本語か、韓国語のどちらかを選ばなくてはいけないことになったそうです。当時アニメ「ナルト」を見ていて、兄弟たちも賛成したので、日本語を選んだそうです。

卒業後、日本の大学院に進学したくて、2017年に京都の日本語学校に通い勉強していた時、この先生に岡山を勧められて、岡山大学に進学することになったそうです。

中国では一人っ子政策が有名ですが、楊さんは3人兄弟だそうです。お兄さんと妹さんがいます。ご両親は、かなりの罰金を支払ってきたのは、お父さんが自営業でひまわり」の種を加工する工場を経営しておられ、比較的裕福なご家

庭のようです。

ここで、楊さんから私たちに質問がありました。日本人は「海」をどう思っているのか知りたいということ、それぞれに答えました。

私のほうからも聞いてみると、「海」を初めて見たのは大学の時、上海に来てからだそうで、今まで一度も「海」に入ったことはないそうです。

今年の夏に渋川で泳ぐことに話は進んでいました。

これからもお付き合い宜しくお願いします、と締めくくりました。

日中新聞だけの宣伝では、広がりに限られています。今回は公民館にもチラシを置かせていただきました。京山公民館と岡西公民館、たかしま公民館の3つです。

すこし反応がありました。参加までにはなりませんでしたが、これからイベントがある場合は、各公民館にチラシを置かせていただきます。

故小林軍治と第六次龍爪開拓団」その2

近現代研究者 青木康嘉

4. 日の出郷

1913(大正2)年、父の小林光雄は高梁市高倉町田井白木で生まれた。小柄な人で徴兵検査も5尺3寸に足りず不合格(丙種合格)だった。1937(昭和12)年、26歳の時に三徳塾で研修を受けた後、先遣隊として入植した。1915(大正4)年、母の静恵は井原市稲木で生まれた。尋常小学校卒業後、清輝橋(岡町)に姉夫婦が酒屋をしていて、その店の手伝いや家事手伝いをしていた。1939(昭和14)年8月、光雄は家族招致で一時帰国して、お見合いをして、10月6日に母静恵と結婚し、10月28日に渡満した。11月3日、龍爪に着いた静恵は、こんな寒いところで百姓をするとは思わなかった。大変なところへ来た」と思ったという。広田内閣が重要国策として満州農業移民百万戸移住計画」で推進した当時の言葉で、こうした結婚を大陸の花

嫁」と呼ばれる。気候や風土の違いもあって、結婚後、1940(昭和15)年に生まれた長女恵子(2歳)は、1942(昭和17)年7月に龍爪開拓団在団中に病気で亡くなった。しかし、待望の長男軍治が、同じ年9月22日に誕生した。昭和16年の関東軍特種演習で、龍爪開拓団は食糧基地として軍納野菜など供給し、経済的にも豊かになっていた。農業だけでなく、牧畜にも力を入れていた。最高時には馬5頭、牛3頭、鶏8羽、豚40頭を飼っていた。現地の中国人苦力を20人雇っていた小地主」になっていた。(小林軍治無告の民の語り部として「から引用)そんな父光雄にも、昭和20年7月25日に現地召集令状が来た。32歳だった。

1983(昭和58)年6月に、軍治は龍爪会訪中団の一員として、父光雄と軍治は龍爪開拓団を訪れた。(2面へつづく)



男性14名、女性4名の計18名の参加者だった。戦後38年目の悲惨な逃避行を体験した人たちが参加した。この頃、日本では訪日調査が2年前から始まり、残留孤児の肉親捜し」がニュースで報じられていた。まだ中国も改革開放経済が始まったばかりで、中国はまだ貧しく、龍爪開拓団の面影も多く残っていた。当時は大阪空港から北京、ハルビンへと飛び、ハルビンから列車で移動した。参加者は、横道河子、拉古、牡丹江、仙洞、北星、龍爪、林口と駅名を見るたびに窓を開け、身を乗り出して各自の体験を語り、カメラに収め、涙ぐんだ。手を合わせ、一点を見つめた。

林口駅では300人の人達が歓迎してくれた。戦後初めて見る日本人だった。父光雄は、元住んでいた日の出郷の我が家があった場所をすぐ見つけることができた。家も後から建てられていた物だったし、住んでいる人も知らない人だった。「ここが私の生まれた家か」と軍治には言い知れぬ感慨があった。父の光雄は、ここで死亡した姉の恵子を供養した。小石を拾って帰った。この家の住人は、温かく迎えてくれ、案内してくれた地元の若い女性(雑貨屋勤務)と記念写真を一緒に撮った。

5. 逃避行

1945(昭和20)年8月9日、ソ連軍が参戦し、ソ満国境を突破した。その未明林口駅付近を空爆した。団本部に集合がかり、自決か牡丹江方面に逃げるか話し合われ、逃避行することを決定した。8月12日、老人、女性、子ども約1000人の団員が、約2500頭の馬車に荷物を載せて日本軍陣地があつた仙洞に向けて出発した。湿地地帯もあつて、馬車を捨て、馬の背に実用的な物を残し進んだ。七星までは、線路沿いに歩いていた。8月13日、ソ連軍は虎頭方面から林口に侵攻したと情報が入った。ソ連軍が何度も照明弾を撃ってきたので、七星から牡丹江を渡つて、頭道河子に向かった。その中に、臨月の小林静恵と軍治母子が歩いていた。牡丹江を渡るために一本の八番線(鉄線)を頼りに、臨月の母が、軍治を背負って渡った。それから約一ヶ月間、山中を彷徨した。団長がキャランスキー製材所で団を解散し、自由行動」となったため、逃避行は艱難辛苦を極めた。軍治(2歳10か月)の母静恵は、山中で赤ちゃん(光静)を出産した。しかし、赤ん坊を殺すか、軍ちゃんを殺すか」と同行の人につめよられたという。乳も出ない中で、赤ちゃんに生きていける道はなかった。龍爪開拓団員は、岡山県関係者だけでも、子ども中心に13人の犠牲

者を出した。団が解散して30人ぐらいで行動していた静恵のグループも10人ぐらいになっていた。軍治はやつて眼ばかりギョギョロ光らせてた状態だった。以降9月半ば、どうも様子がおかしい」野たれ死にするよりはまし」と、ソ連軍の捕虜になる事を覚悟で下山した。軍治と母は、横道河子で捕虜となり、荷物検査を受けた後、海林、拉古と収容所を転々とした。無蓋列車でハルビンへ送られた。10月中旬、ハルビンの元日本人学校の花園小学校へ収容所された。ロシア風の三階建ての小学校には、約2000人の日本人難民が収容されていた。栄養失調や発疹チフスで子どもや老人から死んでいった。多くの母親は、餓死を逃れるために子どもを中国人に預けたり、売ったりした。花園小学校の龍爪開拓団員の多くは、10月20日頃新京に向かつていき、室町小学校に収容され、その後東大房身の軍官舎(緑園)に移った。静恵と軍治は花園小学校に暮らしていた。父親光雄は敗戦後捕虜としてシベリア抑留される途中で脱走(民間人とわかり解放された説もある)した。父も腕時計をとられ、ハルビンで友人と働いていた。花園小学校にいたとうわさを聞き、二人を探してくれ父光雄と再会した。餓死寸前で出会った軍治は父親が持ってきたおにぎりをむさぼり食べたという。岡山県の龍爪開拓団

員の3歳以下で生きたのは、軍治を含めて3人しかいなかった。生きて、引き揚げる事ができたのは、はしかの免疫があつたこと、父親との再会があつたからこそ軍治は語る。

6. ハルビンから葫蘆島へて帰国へ

ハルビンの日本人街で、飴や食べ物売ったりして、小林親子三人は一年間暮らした。ただ、父と母の関係が良くなかったという。光雄は召集された時は、静恵は臨月に近い状態で妊娠していた。再会した時は、母と軍治と産まればかりの子ども三人と父は会えると思っていた。光雄は逃避行がどんなに過酷だったかを知らない。産まれたばかりの子と軍治の二人を連れて避難したいという母に、産後の身体で一人でも大変なのに無茶だ。「赤ん坊を殺すか、軍ちゃんを殺すか」同行の責任者に詰め寄られた。母の乳も出なかった。10日余りで光静は餓死した。母は、山中にこの子をくるんで埋めた。父の光雄はこの事実を理解し受け入れることができなかった。この時の様子を話す母の顔は苦渋に満ちていた。1945年9月2日、光静は死んだ。軍治は語る。「母は、三歳以下の

幼児の多くが死亡する中、私を中国人にも預けず(残留孤児になつても不思議でない)、まさに地獄と化した「旧満州」から、やせ細った身体で、よくぞ生きて日本へ連れて帰ってくれたと感謝の気持ちで胸がいっぱいになる。」『無告の民』1946年春から国共内戦が始まり、引き揚げの日を待った。ハルビンの日本人街でアイスクリームや豆腐を売って生計を立てた。1946(昭和21)年9月末、葫蘆島を出発して、10月14日佐世保港へ上陸した。軍治4歳だった。

この日付を見て驚いた。歌手の加藤登紀子は1943(昭和18)年12月生まれだから、2歳10か月だった。『ハルビンの詩がきこえる』加藤淑子・加藤登紀子著(藤原書店)に次のような記述がある。同じ引き揚げ船で帰っている。

次回の新聞放送作業は4月14日(金)午前10時半から民主会館2階で行います。前回お手伝いくださった方です。